

研究

姫岳の戦と

大内勢の堅田俊成

会員 高木嘉吉



(姫岳位置圖)

一月十五日、同好の士数人と姫岳を探訪した。
 姫岳は津久見市と白杵市の境にある、標高六二〇米の
 ひとつしりした山である。白杵市在住の近藤さん、紫内さ
 お願いで川原内から登った。

川原内は姫岳山塊をかなり登った所であり、そこま
 幸で行けるので、あとの登りはらくであった。昔東神野
 から白杵に通っていた山径が主峰の腰を通っている。そ
 れをかなり進んでその道にわかれ、愈々主峰に分かる。
 と言っても道は勾配がゆるやかで、小雨に湿った落葉が
 教唆めていて気持のよいコースであった。

間もなく頂上には達する。津久見の青江の谷と、白杵川
 上流の谷が前と後に指願の間に展望される。まだ展望が

終らない内に濃い霧が
 分かつて、視界をささ
 ぎつたのは残念であつ
 た。
 永享の昔、大友持直
 が大内持世を大將とす
 る中国勢、及び河野通
 久の率いる伊豫勢が大
 軍を相手に悪戦苦闘し
 た跡は、全く湮滅して

痕ぶべくもない。しかし姫岳の大きな山や谷を歩き、持
 直の前進基地であつた東神野の里を訪ね得たことは嬉し
 いことであつた。

此の際姫岳の戦から大内勢の堅田進入と続く、永享、
 嘉吉年代に於ける大友対大内の争闘を、拙著大友史料か
 ら摘記して参考にして下さい。

大友、大内の争闘は北九州を舞台として、永享二年(一四三〇)二月中旬頃から開始された。大友氏は持直で、菊
 池持朝、小貳満員が味方していた。対する大内氏は盛見
 の代であり、將軍は六代義教である。合戦の直接原因は
 筑前争奪である。

義教は使者を送つて調停を計つたが成功せず、永享三
 年四月二十九日には盛見が筑前文菜新滅を攻略している。
 更に同年六月二十八日には、大内盛見は筑前系柳井原に
 於いて、大友持直及び小貳満員の連合軍と戦い、敗れて
 自刃した。

此の盛見を殺したことが以後の争闘に於いて、大内持
 世として持直に對して調停をかき立てさせることになり、
 又將軍義教として持直の討伐を決意させた。

幕府は使僧覺信等を九州に下すと同時に、安芸、石見
 兩國の士に對して、大内方に合カすべき旨の教書と下し
 た。(永享三年七月十六日)

他方幕府は大友連合軍の結束を切崩さんがため、其の
 内部撥乱を策した。即ち幕府は大友持直の筑後国守護職
 を罷免して、之を菊池持直に与え、以て菊池を大友より
 離反させ、大内方に合カせしめようとした。(三年八月)
 一方大内氏の内部では盛見の跡取りをかかへて、持世
 持盛の兄弟が抗争した。永享三年十月二十三日義教は持
 世と大内氏を惣領に命じ、持盛に長門国守護職以下を安
 堵せしむる内書を發した。しかし持盛が満足する筈もな

く、兄弟の抗争は長く続くことになる。

永享四年二月頃、義教から大友親綱、菊池持朝、其他九州の諸將に対して、大内持世の味方として忠告を奉ずべき旨の命令が発せられた。

同じ頃義教は再度調停の使節を九州に下している。之は持直を欺く偽装工作であつたと思われる。それは永享四年三月十七日に、兩國勢（安芸石見）に持世に加勢の左めの出動命令が、管領山名時然によつて發せられてゐることでも明らかである。

大友親綱はかねて持直と不和で、大内持世の陣營に投じた。又持直は大内持盛と結んだ。かくして同族相蕪い権岳の嶺の素地が形成された。阿蘇を率わせて其の力をそぐことは幕府の政策であつた。

大内持盛は永享四年二月十日、持世と豊前を襲撃した。が成功せず、一旦豊前から周防に帰つたが、同年三月十四日九州に落ちた。

永享四年九月二十六日に大内持世が、幕府に差立てた書状の中に、日田、四原、佐伯之等三人方へ、大友親綱の麾下に属して忠節を致せという、御内書さお下し成さるる様と頼つた一項がある。佐伯氏の勢力が強大であつたことが知られるわけである。

永享四年十月二十三日、義教は持世の申請により、彼の九州渡海を許し、安藝、石見、伊豫三國勢に持世援助の出兵を命じた。

同じ頃、即ち永享四年十月二十六日、幕府は大友親綱を豊後國守護に、又菊池持朝や筑後國守護に補任した。

豊後、筑後及び共に大友持直が守護であつた國である。持直は以後無官の人として行動せねばならぬことになる。

永享四年十一月六日に安芸の小早川則平は、同年十

一月十六日に山石時然に出兵の催促状が発せられている。持世の渡海の時ははつさうしないが、恐らく永享五年の春である。同年四月八日持世が豊前篠崎（八幡市内）に持盛を攻撃し、ついで六月二日には豊前松隈へ陣を遣はしている。

豊後及び近隣の諸將は次第に旗色を明らかにして、どちらかの陣營に投じた。志願親賢は当時大友持直の味方であつた。永享五年七月二十日付の大野郡中村内山野を領知させるとの、持直から親賢宛てた書状が残つてゐる。又阿蘇大官司家は持世に属し、はじめに伊の惟忠が出陣し、ついで父の惟郷が出陣してゐる。

永享五年八月十九日、持世の連合軍は少貳満員を筑前秋月城に攻めて之を攻陥し、満員父子三人を討取つた。満員と持直の結合は固かつたようであるが、各個撃破されて漸員が減んだことは、持直を孤立させることになつた。

勢に乗つた持世の軍は同年九月、持直を府内に攻めて其の城を陥れた。持直は舟に乗つて府内を脱出して行方を晦ませた。しかし持直はわがて親勢を挽回して十一月には大友親綱と共に帰國した。親綱と親綱は親子でありながら敵味方に分れてゐる。幕府の離間策に乗せられたのであろう。持直の帰國によつて親綱は豊後に居られなくなつて、豊前に奔つてゐる。

大友持直の征服ならぬが、事態容易ならざるを見て、十二月二十五日義教は、伊豫、安芸、石見の軍勢に早々出陣する様命を下した。これで見ると九月に持直の城を攻め落したの頃、大内持世麾下の勢力の力のよつたものゝ様である。筑前の少貳満員父子を攻撃した時まで、安芸、石見三國の軍勢が持世に協力してゐたのであるが、彼等は豊後に反叛せず帰國したものと思われる。

永享六年に入つて正月二十日、探題波川満直は肥前神崎に於いて、少貳満貞の弟横岳親房と交戦して敗死した。六月十八日には筑前箱崎で少貳嘉頼と大内持世の軍が合戦し、少貳の兵が箱崎八幡宮に通じこもり、八幡宮が兵火で炎上した。

九月六日大内持世と大友持直の軍が鞍持で戦つた。鞍持は位置不明であるが筑前の内であらうとされている。同年九月、菊池兼朝と其の子持朝が敵味方に分れて合戦した。持朝は大内持世方であり、兼朝が大友持直方であつたが、戦の結果兼朝方が散々に敗れた。同年十一月菊池持朝は筑後に於いて少貳嘉頼及び大友持直と戦い、敗れて肥後に退いた。

かくて戦の舞台は愈々姫岳に移る。永享七年に入つて大友持直を討つため、伊豫の兵が大勢豊後に渡り、大内持世の兵と連合して、数か所の城を焼落した。持直は謀を以て豊後海部郡姫岳に退いた。而して大内勢及び河野勢を行働困難なる場所を誘き入れ、其の後方より之を包圍して激戦を交えたので、大内は敗退し、河野通久、土居通吉は戦死し、持直は大勝を得た。永享七年六月二十九日のことである。

その後持直は主力を姫岳に止め、支隊をもつて永享七年の後半から八年の前半にかけて、豊後各地でゲリラ戦を展開している。

初回の姫岳攻撃に失敗した大内持世大友親綱の連合軍は、更に増援を得て第二回の攻撃を画策した。尋常なる手段で攻落すことが出来ないので、籠城軍の内部分断を切崩し、内外呼応してこれを崩壊に導くべく謀略を廻らした。

田北家に於いては、父の親増は持直に属して姫岳に籠

城し、子の親忠は大友親綱及び大内持世の陣營に加担していた。親綱は親忠を通じて親増と何回目かの交渉を重ねて、遂にこれを寝返らせることに成功した。恩賞を釣して釣つたわけである。親増が姫岳を脱出して親綱の陣に投じたのは、永享八年三月下旬であつた。

同様にして持直の有力な部將、御手洗、薬師寺等が姫岳を去つて親綱の陣に降るに及んで大勢は決した。大内の家臣弘忠から永享八年五月二十一日付で、田北親増に宛てた書翰には、姫岳の落城近きことを報じている。

此の頃になると籠城軍に於いては、糧食が次第に缺乏し、將兵の離城敵側への投降が続出し、士氣沮喪して落城前夜の様相が濃くなつた。

永享八年六月十一日、大内持世、大友親綱等の連合軍は、姫岳に大友持直を攻めて、城に火を放ち内部分断に陥れ、同時に外部より襲撃したので、此の日遂に陥落した。東神野は持直軍の外郭陣地であつたが、これより以前に攻陥された。時期は五月のはじめ頃である。

持直は又脱出して行方を晦ました。永享十三年二月に嘉吉と改元された。姫岳の落城から嘉吉に改元の数年間、持直がどこにどうしていたか明らかでないが、筑後方面に逃避していたのではないかと言われている。

嘉吉元年六月二十四日、赤松満祐が將軍義隆を殺して天下を驚かした。それまで蟄伏していた持直及び其の興党は、満祐に呼応して九州各地に蜂起して乱を作した。

幕府は佐田盛景、志領親頼、志領親泰、毛利憲元等の諸將に命じて、大内教弘に協力させ持直等を討たせた。

大内教弘の九州出兵後の軍事行動については文献が全く明らかなでないが、嘉吉元年八月頃の堅田侵攻もその一環である。当時の佐伯氏と持直との関係は明らかでないが、佐伯氏が日田氏、田原氏と並んで、有力で

あつたことは先にも述べた通りである。筆者の想像であるが佐伯氏は持直を支持していたし、嘉吉の乱後は持直に呼応して反大内氏の旗幟を鮮明にしていたので、或は持直が佐伯に居るのではないかと思つて、大内勢が堅田に侵攻したのではあるまいか。

大友興廉親の大内勢の堅田侵攻の記事の中で、大内義隆は大内教弘に、大友親治(十八代)は大友親隆(十四代)と改めぬが時代が合致する。これは興廉親の著書の考へ違ふ、たつたまいと思われる。

持直は嘉吉二年の末頃から全く没落逃匿して史上から姿を消してしまふが、尚しばらく生存して文安二年(一四四五)正月四日に、波瀾万丈のその生涯を閉じている。

(おわり)

研究

藩庁より米麦稗借の事

漁村羽出浦にある庄屋古文書 (5)

賛助会員 奥部弥右衛門

(前文)

この村は鶴見洋島の北側にあり、田地は皆無、畑地も少なかつたので、食糧は不足して平常他の地方から買入れていたことはいふまでもないが、藩庁から貸しつけを受けていたとは、思いもかけぬことである。

そして米、麦共に返納は月賦で、銀を代納することになつていた。(これは別冊になつてゐる「稗借米代銀取立帳」の記録で判明する。)

然るに、常食に缺ぐことのできない麦の借入数量が僅かであるのに反して、当時蕨漁民の常食には適當でない米の借入数量が極めて多い点に不審を感じていたところ、因らざるも米麦の借入番節が、麦は端境期に当る春二、三月頃の借受けであり、米は冬十一月、十二月の借受けになつてゐるので、麦は食糧不足による借受けであるが、米の方は食糧不足というよりも、新たなる年を迎える正月用に充てる糧米目的も含まれていたのではないかと考へる。

このあたりは漁村では江戸時代から(第二次世界大戦の頃制定された食糧配給制度の實施されるまで)、年米になる年米といつて、普通家庭で糶米一俵、糶米一俵(三斗八又四斗八)を買入れて正月を迎える風習があり、年米が近省くと、たとえ借金してもこの米を買い調えていふ(現今もその風習は残つてゐるが、数量は幾分少なくなつてゐる)ので、それらの関係から年米には多量の米を稗借してゐたものでないかと思われる。それが為には何程かの借金をして、長年の間その返済に苦しむ者もいたらしいが、苦しい境遇にありながら、米まで稗借して一家睦まじく正月を楽しく迎えていた点には、味わうべき何ものかがあるような感がある。そして沢山の餅を搗いて、お雑煮又は焼餅として、正月中一家楽しく食べていた。

その関係文書は、次の十通である。

(篇集者製版の都合から越えまでに)

制点日親筆書、役印とあるところ日庄屋以下村役人の連署捺印第百資料乙の如し、すべて提出の上書と控書である。